

グリム・メルヒェンのある〈神話〉の終焉をめぐる —— 1975年のレレケ論文再考 ——

Um das Ende eines >Mythos< in Grimms Märchen —— Überlegungen über H. Röllekes Aufsatz von 1975 ——

小高康正
Yasumasa Kotaka

まえがき

1985年、86年はグリム兄弟の生誕二百年にあたり、世界各地で様々な催しが行なわれた。そしてこの時期をきっかけにしてグリム・メルヒェンの分野においても幾つかの重要な研究が発表された。その一つに米プリンストン大学で行なわれた学際的なシンポジウムとその時の発表をまとめた論文集『おとぎ話と社会—幻想・ほのめかし・規範』がある¹⁾。

ここにはM. タター、R. ポティックハイマー、J. ザイプスといった、その後のアメリカでのグリム・メルヒェンの研究を代表する人たちが顔をそろえていた。

彼らの研究は『グリム童話集』(Kinder-und Hausmärchen durch die Brüder Grimm)を伝承されたままの民話と見なすのではなく、グリム兄弟によって手直しされ、作られた作品としてとらえようとする立場が共通してみられる。そこで19世紀初めのドイツのおかれていた歴史的背景や社会的状況と関連させたり²⁾、グリム兄弟の育った家庭環境やそこで身につけたであろうイデオロギーや宗教的、倫理的価値観と結びつけて解釈している³⁾。彼らの多様なアプローチはアメリカのみならず、日本やドイツでのメルヒェンの研究に新たな刺激と展開を与えていった⁴⁾。

このように広く社会的、歴史的、心理学的な、グリム・メルヒェンの解釈が可能になった背景には、1970年代からなされたハインツ・レレケ(Heinz Rölleke)による一連の『グリム童話集』

のテキスト校訂の仕事の貢献があったと考えられる⁵⁾。

それと同時にレレケによる語り手と文献の出所を掘り起こす研究は、これまで十分解明されずにきた多くの事実を明らかにした。なかでも『グリム童話集』の提供者(語り手)にまつわる「神話」の終焉の宣告は⁶⁾、グリム・メルヒェンの研究史にとって重要な出来事と見ることができる。

グリム兄弟のメルヒェン集が形成してきた「神話」とは、『グリム童話集』はグリム兄弟がドイツの民衆から聞き集めた話で、純粋にドイツのメルヒェン集であるという見方であるが、こういう特徴づけにこれまでも疑問を持つ意見は見られたが、レレケ論文はそのような「神話」の終焉を実証的に根拠づけたという意味で画期的なものであった。

しかし、いったんは衝撃をもって受け取られたレレケの語り手に関する「発見」は、その後のグリム・メルヒェンの研究や解説において、その内容と意義が十分に受けとめられているとはいえない。

そこで本稿では、1975年のレレケ論文とその後の受けとめ方を検討しながら、その論文のもつ意義と今後のグリム・メルヒェン研究の課題について考えてみたい。

1

1975年にハインツ・レレケは、「<マリーばあさん>の<きつすいのヘッセン>のメルヒェン—『グリム童話集』の初期の聞き書きにまつわる神

話の終焉」という論文を発表した⁷⁾。従来、「いばら姫」や「白雪姫」「兄と妹」などよく知られた話をグリム兄弟に語ったのは、ヴィルト家の家政婦の「マリーばあさん」であると取り違えられてきた。ところがそうではなく、ハッセンプフルーク家の姉妹のひとりの「若きマリー」であったことを明らかにしたものであった。

「マリー」が取り違えられてきた発端は、ヤコブ・グリムの息子で、ベルリン大学の教授であったヘルマン・グリムが次のように回想し、家政婦の「マリーばあさん」が重要な語り手であることをほのめかし、どの話が語られたかを証言していたのである。

「太陽薬局（ヴィルト家の経営一筆者注）にはたくさんの廊下、階段があり、何階建てかで、私自身子どもの頃そこらを荒らし回ったものだが、その子ども部屋をとりしきっていたのは戦争未亡人の〈マリーばあさん〉だった。…メルヒェン集の第一巻は、このおばあさんから、もっとも美しいメルヒェンを受けついたのである⁸⁾。」

ヘルマン・グリムが示した話は「兄と妹」「赤ずきん」「手なし娘」「盗賊婿」「死に神の名付け親」「仕立屋の親指小僧」「いばら姫」その他である。

ところが、グリム兄弟は個々のメルヒェンの語り手については詳しく記録していなかったので、特に早い時期に聞き書きされた話のなかには語り手をはっきりと確認することが困難なものもあった。そのため語り手を取り違えたり、理想的な語り手を作り上げるというフィクションが生まれたりした。

レケはグリム兄弟の弟ヴィルヘルムが『グリム童話集』の本人使用本に残した語り手の名前と日付についての手書きメモを手掛かりにして、グリム兄弟に重要な幾つかの話を提供した「マリー」という女性はハッセンプフルーク家の姉妹のひとりの「若きマリー」であることをつきとめたのであった。

レケによって解明された本来の提供者「若きマリー」、つまりマリー・ハッセンプフルーク (Marie Hassenpflug, 1788-1856) という女性は、ハッセンプフルーク家の長女で、この家族はフランスから亡命してドイツに定住したユグノー (カ

ルヴァン派新教徒) の人びとの子孫であり、当時のカッセルの町のブルジョアに属し、彼女自身、十分な教養を備え、ドイツ語の読み書きだけでなく、フランス語にも堪能であった。

このレケの研究は、単にグリム童話のひとりの語り手のひとまちがいを訂正したというにとどまらず、グリム・メルヒェンの提供者 (語り手) をめぐって、『グリム童話集』全体の性格づけの問題に関わっていた。

グリム兄弟は話の提供者については、『グリム童話集』の初版 (第2巻, 1815年) の序文にはじめて具体的な語り手の名前をあげているだけで、それ以外は彼らが各話に付けた注釈にも記されてはいなかった。

唯一名前を挙げられたのは「フィーマンおばさん」と呼ばれた、ドロテア・フィーマン (Dorothea Viehmann, 1755-1815) である。彼女は『グリム童話集』全体の中の5分の1近くに当たる40話の話に関わっており、グリム兄弟によって「50歳をあまり越えてはいない」「カッセル近郊ツヴェレン村の農婦」で、「純粹にヘッセンのメルヒェン⁹⁾」を提供してくれた理想的な語り手として紹介された。

だがその後、実はこの女性は、旧姓をピエソンといい、ユグノー派の子孫であることがわかり、グリム兄弟が言うように、農婦ではなく、広い知識と教養のある「村の仕立屋の妻」で、家庭菜園の産物をカッセルの町に売りに来ていただけであることが明らかになった¹⁰⁾。

このようにグリム兄弟にメルヒェンを提供した人びとのなかにフランスのユグノー出身の語り手が少なからずいたということが、グリム兄弟の死後明らかになるにつれ、『グリム童話集』を純粹にドイツのメルヒェン集として扱う考え方に疑問が持たれることもあった。しかし『グリム童話集』はグリム兄弟がドイツの民衆から聞き集めた、純粹にドイツのメルヒェン集であるという「神話」は根本からくつがえされることはなかった。

ところが、マリー・ハッセンプフルークという提供者の存在は、ドロテア・フィーマンと並んでシャルル・ペローやその他のフランス系のメルヒェンと依存関係にあることを裏付ける証拠となっ

たのである。

レレケは、インゲボルク・ヴェパー＝ケラーマンがすでに1970年にドロテア・フィーマンやマリー・ハッセンブルークの家系を考えると『グリム童話集』を〈原ドイツ的神話〉と性格づけることはいぢるしくゆらいでくる¹¹⁾と言ったことの正しさを評価しながら、次のように述べている。「この神話が実際に崩壊することを防いできたのは、〈マリーばあさん〉を、すぐれたヘッセンの伝承者とするフィクションだけである。この議論は、今やちょうど反対になってしまう。なぜなら、マリー・ハッセンブルークの語ったメルヒェンは、他でもない、ペローとドルノワ夫人のお話しに深くなじんだものであることが、はっきりわかるからである¹²⁾。」

2

レレケ論文が発表された翌年に日本でも高橋健二氏によって朝日新聞に次のように紹介された。

「グリム童話の出所について、八十年來の定説をくつがえす新研究が発表されて、学界に大きな衝撃を与えている。…話を提供したマリーは、上流市民階級のハッセンブルーク家のマリー嬢と断定されたのである。それはグリム童話の価値を揺るがすものではなく、むしろ「子どもと家庭との童話」は、ドイツ固有の民族童話だという窮屈な観念にこだわらずに、味わわれてよいことを証拠だてることになった。…こうしてグリム童話はドイツ生粋の民話ばかりとは言えないのである¹³⁾。」

レレケ論文の反響のひとつに、果たしてどの程度まで『グリム童話集』を「ドイツ固有の民族童話」と見なしうるか、提供者の出自をどの程度まで考慮しなければならないかという受けとめ方があったと思われる。簡単に言えば、純粋にドイツ的かそれともフランスからの影響をうけたものかという見方である。

世界に同じタイプの話が伝播している口承のメルヒェンを念頭におけば、個々の話を特定の国や地方に限定することは困難なことであるし、それぞれの話の特徴を比較していかなければ実りある成果は期待できないだろう。

そういう点では、グリム童話の個々の話を広く世界的視野の中で検討することを促しているとい

う受けとめ方は、妥当ではあるが、その背後の問題にまでは触れてはいなかった。

また同時期、レレケの研究を日本に紹介した論文に野口芳子氏の「Märchen 研究の新しい方向について」がある¹⁴⁾。

野口氏はドイツでのグリム・メルヒェンの語り手についての研究をたどりながら、レレケ論文の内容を詳しく紹介し、次のように問題をとらえていた。つまり、「主として、若いブルジョアの令嬢、それもフランス文化の影響を強く受けている人々から集められた Grimm の KHM がドイツの Volksmärchen と決めつけられてしまった。そこにそうせずにはいられなかった、ドイツの歴史のひとつが映し出されている。生粋のドイツの Volksmärchen と信じ込まれていった Grimm の KHM も、語り手についての研究が進むに従って、次第にその虚像が崩れていった。そして、ここで今一度改めて、Volksmärchen とは何なのか問い直されている¹⁵⁾。」

つまり、ここでは「神話」を産み出した原因をドイツの歴史の中に探る必要があることが指摘されていた。

レレケの「マリー」についての発表はその内容ゆえに、ドイツにおいては大きな衝撃をもって受けとめられたが、その客観的評価はかなり遅れている¹⁶⁾。

「グリム神話」の終焉は、なかなか浸透していかなかったようである。

レレケの論文が英語圏で翻訳されたのは1986年になってからであり、先に触れたポティックハイマーの編集による論文集、『おとぎ話と社会—幻想・ほのめかし・規範』においてである。日本でも事情はよく似ている。

1985年にグリム兄弟生誕 200 年を記念して国際的なシンポジウムが大阪で開かれ、その後『現代に生きるグリム』(1985年)に小澤俊夫氏によって翻訳、紹介された。

レレケはその際、「日本語訳の刊行にあたって」として、次のような言葉を寄せている。

「有名なグリム童話のうちの多くの話が、「マリーばあさん」に由来するものでなく、半分フランス系の若い女性(マリー・ハッセンブルーク)に由来するものである、という発見は、ドイツ人

を驚愕させ、フランス人を喜ばせました。この翻訳によって私の発見が客観的に評価され、日本におけるグリム研究に寄与することになれば、それは私の大きな喜びであります¹⁷⁾。」

「神話」の終焉は皮肉なことに、グリム兄弟の生誕200年を記念する中でだんだんと浸透していったと見ることができる。

3

そのなかで、レレケの提起した問題を、神話を産み出した原因を追及する形で受けとめたのは、ジョン・M. エリスの『一つよけいなおとぎ話』であろう¹⁸⁾。

エリスの扱っている問題は、大きく三つに分けられる。第一は、取材源に関する問題、第二は、編集、出版にまつわる問題、第三は、研究史をめぐる問題である。

エリスはまずグリム兄弟のKHM初版の序文での主張を取り上げ、それが偽りの印象を与えようとする、虚偽の発言であるとみなしている。そしてそこから現在まで続く「通念」が生まれてきたと考えている。その通念とは、彼らの集めた話は農民から集めた、生粋のドイツの話であり、そして、彼らはそれに根本的な変更は加えていないとする見方である。

現在の研究者はこれらの通念の誤りを正そうとしないで、逆にこれまでの通念にしがみつき、防衛をしようとさえしているというのである。

語り手について、エリスはグリム兄弟が以下のような提供者に関する情報を隠していたと主張している。

- (1) メルヒェンの提供者はすべて、中流階級の、読み書きのできる人びとだった。
- (2) 民間の提供者を熱心に捜し回ったのではなく、もっぱら身近な友人やその家族から話を集めただけだった。
- (3) ハッセンプフルーク家はユグノーの出で、常日頃、家の中ではフランス語が使われていた。
- (4) 語り手の多くは若い女性だった¹⁹⁾。

エリスが主張しているこれらの論点は、これまでのグリムのメルヒェンの研究史の中で少しずつ明らかにされてきたものであり、それ自体新しい

発見というよりも、エリスも言うように、再解釈をしたものである。「これは再解釈の書である。その目的は、世に知られている証拠のすべてをまとめ、分析し、それが逃れようのない結論につながってゆくのを示すことにある。つまり、グリム兄弟は自分たちの『メルヒェン集』の性質を、意図的に、執拗に、そして徹底して事実とはちがったふうに、しかもそれが虚構と知りつつ述べたのだ²⁰⁾。」

だが、エリスはこの書の中であたかも「グリム裁判」を開いているようにみえる。しかも彼自身は裁判官の役割というよりも、検事役に徹し、グリム兄弟を虚偽の証言、証拠隠匿の罪で告発しているようだ。その告発の調子はこれまでのグリム研究者をも共犯とみなし、それはレレケの研究にまで及んでいる。

このようにエリスの意図的にグリム兄弟の仕事を悪意にとるような印象を与える解釈は、他の研究者からも批判を受けている。

「彼はハインツ・レレケやその他ドイツの学者の原典研究を大いに参考にしながら、彼らの研究成果を歪めてとり、グリム兄弟は二枚舌だという神話を作りあげている²¹⁾。」

日本でエリスの翻訳、『一つよけいなおとぎ話』（池田香代子他訳、新曜社、1993年）が出たのは1993年になってからであり、そのセンセーショナルな内容と断定的な口調ゆえに日本ではレレケの研究以上に目立ったものとなった。

「なんとも刺激的な本である。事件といってもいい。様々な研究や証拠を集大成して、グリム兄弟のメルヒェンはドイツの民衆の言い伝えにもとづいている、という通念の息の根を、これを最後に止めようとしているのだから、グリムのメルヒェンの多くは、フランス系のブルジョワがもたらした話を兄弟が潤色したものだった！²²⁾」

ある書評では、告発の調子を冷静に受けとめ、その内容を吟味する必要があることに注意をうながしている。「かなりの説得力である。ドイツの良心とも称される兄弟は、救済されないのか。しかしあまりに激烈な告発の修辭の部分を取りはずして、再考してみよう。〈うそつき〉呼ばわりを留保して、〈うそ〉のメカニズムを冷静に仕分け

しょう²³⁾。」

近年、アメリカのグリム童話研究の紹介を意欲的に行なっている鈴木晶氏は『グリム童話—メルヘンの深層』(講談社現代新書、1991年)において、エリスの日本語の翻訳が出される前に、エリスのグリム兄弟「欺瞞」説を紹介し、そのまま賛同を表明していた。

「グリム兄弟は右の四つの事実(先に示した語り手についての主張—筆者注)を隠蔽するためにメルヘンの提供者たちの名を明らかにしなかったのだというエリスの主張はそのまま認めざるをえない。彼らが〈嘘をついた〉ことは事実である²⁴⁾。」

かれは日本におけるグリム童話研究者のレケ論文の受けとめ方にも批判的に次のように述べている。

『『グリム兄弟』(新潮選書)の著者、高橋健二氏は、レケの論文が出たあとでも、『彼女(マリー・ハッセンプフルーク)や妹たちは、なんと言っても、ドイツで生まれ育ったのであるから、ひたすらフランス的な話だったとは言えない。そもそもメルヒェンは国境を越えたものである。』と述べている。まるで問題をそらそうとしているかのようだ²⁵⁾。」

「レケの論文を日本に紹介した小澤俊夫氏ですら、『この発見をみて、グリムのメルヒェンが純ドイツ的なのか、フランス的なのかという二者択一のみ興味を奪われたら、それは浅薄なことである』と釘を差しており、問題を矮小化しようとしているかのような印象をあたえる²⁶⁾。」

では、本来の問題とは何か。ここで鈴木晶氏は、エリスがドイツのグリム研究者たちに対して行なった批判を日本の代表的なグリム研究者にあってはめようとしているようである。

「グリムを尊敬する学者たちにとっては、こんな立派な学者が、エリスの言うような『腹黒い嘘つき』であってはならないのだ。それに、仲のいい兄弟が力を合わせて童話集を編んだという話はじつにメルヒェン的である。高橋健二氏はグリム兄弟について「この上なく感動的で、人類の歴史の中でも最も創造的で美しい人間関係といえよう」と述べている。グリム童話に関心を寄せる人びとの心の中には、そうしたイメージを壊したく

ないという無意識の願望があるのではなからうか」と述べた後、鈴木晶氏は、エリスと同様に、「ナショナリズムと、グリム兄弟に対する尊敬の念によって、グリム童話の提供者をめぐる神話が温存されてきたのだ²⁷⁾」と、グリム兄弟が行なった欺瞞的なやり方とそれを支えてきた研究者に問題があること強調している。

4

これまで見てきたように、レケ論文の反響はいまなお続いているといえよう。レケは、ヘルマン・グリムの証言に端を発した、グリム童話の初期の聞き書きにまつわる「神話」にピリオッドを打ち、はっきりと提供者の素性を認めねばならないことを強調した。

だが、この「神話」が根強く「神話」として生きながらえてきたのは、グリム兄弟の生涯と仕事、ひいては彼らの存在に対する神話化が行なわれていたからである。それゆえ提供者をめぐる問題はそのままグリム兄弟に対する評価の問題となることがことになる。

「グリム(兄弟)が『グリム童話集』第二版の序文で、フィーマンおばさんのことを理想的に描いたのは、まったくのつくり話であったことを認めざるを得なく」なり、それも「グリム兄弟は、おそらく良心に反して、フィーマンおばさんを、理想的なヘッセンのメルヒェンの語り手²⁸⁾」にしたということがはっきりと言われてみれば、レケ論文がドイツにおいて、センセーショナルに受けとめられ、評価が大きく分かれたこともうなづけよう。

レケ論文はしかし、グリム兄弟に対する批判を主眼に置いたものではなかった。それゆえ、その面での不徹底さゆえに、問題の関心がグリム兄弟の姿勢に向かっていったことも必然的な流れで、いわば大きく揺れた「神話」終焉の余波ともとれる。

エリスはグリム・メルヒェンの研究史を洗い直し、「再解釈」した。彼はグリム兄弟の「欺瞞」説を打ちだし、ドイツのグリム研究者をも共謀の罪で告発しているようである。しかしそれはザイプスも言うように、ドイツの民族主義を非難するという、あまりに固定観念にとらわれたものであっ

た²⁹⁾。

これまでショーフやボルテによって実証的に進められてきたはずの語り手の研究は、レレケも指摘するように、「強くヘッセン風あるいはドイツ民族風の傾向のあるメルヒェン研究者の気持ちにふさわしい語り手³⁰⁾」を求めるあまり、フィクションの語り手を作り出す結果となった。

このような語り手にまつわる「神話」を生みだし、ながらえさせた責任をレレケは先のグリム研究者らにあるとしているが、グリム兄弟がメルヒェンを収集し、編集を始めた頃の文学的事情や、十九世紀初頭のドイツが置かれていた、歴史的、社会的諸条件にも帰せられるべき問題もあるだろう。しかしそれは、エリスが主張するようにグリム兄弟の「欺瞞」とする解釈からは実りある成果は期待できない。

彼らのメルヒェン集の仕事に当時のナショナリズム、台頭する市民階級のイデオロギー、彼らの家庭のプロテスタント的諸価値が強く影響を与えていたことは最近の研究でも主眼の置かれているところである。

エリスは語り手については、グリム兄弟はフィーマン夫人やハッセンプフルーク家がユグノーの出身であることを知っていながら、意図的に隠していたという立場に立っていたが、その後の研究者もユグノーの出身はわかっていたが、その重要性に気づかなかったという彼の説には耳を傾けざるを得ない面がある。

彼はグリム・メルヒェンの研究史を辿り直し、すでにショーフが1959年の研究の語り手についてのコメントで、フィーマン夫人がユグノーの出身であり、彼女の話の出所はハッセンプフルーク家と同じくペローであると言っていたことを指摘している。さらに、その事実の重要性を指摘したのはインゲボルク・ヴェーパー＝ケラーマンであったが、一般には受けとめられず、結局、これが周知のものとなるまでにはレレケによって1975年に編集された『グリム兄弟の最も古いメルヒェン集』での確認まで待たざるを得なかったというのである³¹⁾。

5

1985年、日本でグリム兄弟生誕200年のシン

ポジウムの席でレレケは、1975年の論文はこれまでのグリム童話の研究を訂正したが、これは解決ではなく、第一歩にすぎないと述べている。

1975年のレレケ論文とその後のレレケによる『グリム童話集』の厳密なテキスト校訂（出典や提供者の研究も含む）によって、グリム・メルヒェンの研究が新たな段階に入ったことは異論がないと思われる。

特にグリム・メルヒェンの語り手の研究にとっては大きな転換を意味している。

「ペローのこの散文メルヒェンの影響力は、特にドイツの伝承を考えるばあい、いくら評価しても評価しきれないものがある。しかもグリムの率直な賞讃の辞は、フランスからの影響をなるべく低く見積ろうとする、あるいはごまかして全くなかったことにしようとする過去数十年にわたる傾向（それは第三帝国における民俗学で頂点を極めたのだが）を訂正し、恥入らせるものである³²⁾。」

このように今やグリム・メルヒェンの初期の提供者がフランスのユグノー出身者であり、彼らは明確にペローやその他のフランスのメルヒェンに親しんでいたことを客観的に評価する場が開けてきたことは大きな成果と言えよう。今後重要なことは、グリム兄弟が行なった実際の編集作業をたどりながらそれを検証し、グリム兄弟のやり方を公正に認めることであろう。具体的に、グリム・メルヒェンの提供者（語り手）との関係で考えれば、フィーマン夫人やマリー・ハッセンプフルーク家などのユグノー派の子孫の提供した話とペローの話やドルノワ夫人などのフランスの妖精物語との関係はどのように考えることができるかという問題になろう。

ペローの話とグリム童話との関係については、すでにグリム兄弟自身が気づいており、幾つかの話の注釈の中でも言及している³³⁾。

それらの話の中には、「長靴をはいた猫」や「青ひげ」のように、初版では採用されながら、あまりにペローの話と似ている場合や残酷な話の場合にはその後の版では削除された。しかし、ペローの話との影響関係が明らかな場合でも、最後の版まで残されているものもある。たとえば、ペローの「眠れる森の美女」と同じタイプの「いばら姫」や、ペローだけでなく世界中に見られる「シ

ンデレラ」などは残された。このような事情をどのように考えるか。グリム兄弟のメルヒェンとペローの話との影響関係について、すでに1955年に、はっきりと文献上の影響関係があることを指摘した、R. ハーゲンのすぐれた研究がなされている³⁴⁾。

レケもその後、今後の課題について次のように述べている。「メルヒェン研究とグリム研究にとって、フランスのオリジナルのどの話が、どのドイツ語の翻訳が、グリム兄弟や兄弟にメルヒェンを提供した人たちに実際に知られていたか、知られていたという可能性があったかについて、従来より正確に、またより広範囲に調査することが避けたい課題であることが、ますますはっきりしてくる。このような疑問にはもちろん二つの側面から迫らなければならない。一つは書誌学的事実の面から、もう一つはグリムへのメルヒェン提供者の素性、教育、生活環境の面からである³⁵⁾。」

こういう文献学のおよび社会史的な実証研究と並んで、私にはメルヒェン・ジャンルの歴史的形成の面からのアプローチも欠かせないと思われる。

フランスの文学的メルヒェンに親しんでいたユグノー出身の語り手の存在は、グリム・メルヒェンの文体、様式を形成するにあたって、どのような働きをしたか。彼らのメルヒェンについての概念や語りの様式は、文学史的に見て、ペローの話を下地に持っていたとすれば、それは必ずしも彼らがペローの話をそのままグリム兄弟に伝えたとか、彼らが出所を隠して借用してきたということではなく、メルヒェン・ジャンルの歴史的形成の問題として考えてみる必要がある。つまり、メルヒェン・ジャンルが口承の語りと書物（文学）による伝承（書承）のダイナミックな交流の中で形成され、両者の交流関係は歴史の中で不断に続いていくと考えるならば、グリム・メルヒェンの文学的特徴はペローらのフランスの文学的メルヒェンの達成のうえに成り立ったものと考えることができるかもしれないのである。

（付記：本稿は1994年7月14日、長野大学第61回学内研究会での発表をもとに作成しました。）

（こたか やすまさ 助教授）
（1994. 9. 8受理）

注

- 1) *Fairy Tales and Society: Illusion, Allusion, and Paradigm*, ed. by R.B. Bottigheimer, Philadelphia, 1986.
- 2) Ruth Bottigheimer, *Silenced Women in Grimms' Tales: The "Fit" Between Fairy Tales and Society in Their Historical Context*, in: *ibid.*, pp.115-132.
- 3) *Marxists and the Illumination of Folk and Fairy Tales*, in: *ibid.*, pp.237-244.
- 4) 拙稿「書評・グリム童話(1)—アメリカにおけるグリム・メルヒェン—」(『長野大学紀要』第13巻第1号、25—31頁、1991年)参照。
- 5) これまで数種類の『グリム童話集』のテキストの編集・校訂を行なってきた。その代表的なものを挙げておくと、
—Rölleke, Heinz (Hrsg.): *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm*, Cologne-Geneve 1975.
—Rölleke, Heinz (Hrsg.): *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. Stuttgart (Reclam) 1980.
—Rölleke, Heinz (Hrsg.): *Kinder- und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819*. 2 Bde. Köln 1984.
—Rölleke, Heinz (Hrsg.): *Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815*, Göttingen 1986.
- 6) Heinz Rölleke, *Die, stockhessischen' Märchen der, alten Marie'—Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm*, in: *Germanisch-romanische Monatschrift NF xxv*, 1975. S. 74-86. 「〈マリーばあさん〉の〈きつすいのヘッセン〉のメルヒェン—『グリム童話集』の初期の聞き書きにまつわる神話の終焉」(谷口幸男他『現代に生きるグリム』岩波書店、1985年)。
- 7) 本文の引用では同上書の日本語を参照させていただきました。
- 8) Rölleke, a. a. O., S. 77f.
- 9) Rölleke, Heinz (Hrsg.) 1986, a. a. O., S, IV-V.
- 10) Rölleke, Heinz (Hrsg.) 1975, a. a. O., S.390.
- 11) Ingeborg Weber-Kellermann, *Interethnische Gedenken beim Lesen der Grimmschen Märchen*, in: *Acta Ethnographica Academiae Scientiarum Hungaricae*, tomus 19, pp.425-434 (1970), S.432.
- 12) Rölleke, a. a. O., S.86.
- 13) 「グリム童話 打破される既成の観念」、朝日新聞 1976年11月19日号(夕刊)。

- 14) 「Märchen 研究の新しい方向について」(関西学院大学文学部『独逸文学研究』、1977年)。
- 15) 野口芳子、上掲書、17頁。氏は最近、『グリムのメルヒェン』(勤草書房 1994年)を出版され、その中に上記論文も収められている。
- 16) Lothar Bluhm, "Neuer Streit um die >Alte Marie<?", in: *Wirkendes Wort* 39 (1989), H.2, S.12.
- 17) 谷口幸男他、上掲書、286頁。
- 18) John M. Ellis, *One Fairy story Too Many-The Brothers Grimm and Their Tales*. The University of Chicago Press, 1983.
- 19) Ellis, a. a. O., pp.26-27.
- 20) Ibid., S. viii.
- 21) Jack Zipes, *The Brothers Grimm*, Routledge, pp.77-78.
- 22) 『一つよけいなおとぎ話』(池田香代子他訳、新曜社、1993年)「訳者あとがき」より。
- 23) 樺山紘一、「朝日新聞」書評、1993年9月19日より。
- 24) 『グリム童話—メルヘンの深層』(講談社現代新書、1991年) 118—124頁。
- 25) 同上書、128頁。
- 26) 同上書、128頁。
- 27) 同上書、129—130頁。
- 28) Rölleke, a. a. O. S.82.
- 29) Zipes, a. a. O., p.77.
- 30) Rölleke, a. a. O. S82.
- 31) Ellis, a. a. O., pp.34-35.
- 32) Rölleke, *Die Märchen der Brüder Grimm*, München 1985. S.14 f.. (小澤俊夫訳「グリム兄弟のメルヒェン」(岩波書店、1990年)。本文の引用では日本語を参照させていただきました。
- 33) Rolf Hagen, Perraults Mächen und die Brüder Grimm. *Zeitschrift für deutsche Philologie* 74. S.392-410.
- 34) Rölleke, Heinz (Hrsg.) 1986. 例えば、「いばら姫」についての注釈では、ペローの「眠れる森の美女」(Labelle au bois dormant) の名が挙げられている。
- 35) Rölleke, *Die Märchen der Brüder Grimm*, München 1985. S.17.